

埼玉育ちのグローバル人

（ポッカンマイ）が繋いだ世界

第3回「わんぱくん在来」！

（ポッカンマイ！）また会いましょう！
大宮アルディージャ U-12 コーチ



埼玉県マスコット「コバトン」



遠藤 竜助さん

最終回のタイトル『わんぱくん在来』（ポッカンマイ）は「また会いましょう！」という意味があり、帰り際によく交わされる挨拶です。

私もラオスから離れる時、この挨拶をして去りました。ラオス人は別れの際、「さようなら」という言葉をあまり使いません。さようならと言うと、もうずっと会わないというような意味になるからです。さて、そうしてラオスを去り、私が大宮アルディージャで働くことになった理由を書きたいと思います。最終回もどうぞお付き合いください。

◎私の財産

2年間、ラオスでの青年海外協力隊の生活中には様々な出会いがありました。ラオス人はもちろん、日本で教員を続けていたら出会わなかったであろう方たちともお会いできました。日本サッカー協会の方たち、U-18 男子サッカー日本代表、シドニーオリンピック金メダリストの高橋尚子さん、元サッカー日本代表の永島昭浩さんなど、著名人の方との出会いは大きな刺激と活動のやる気をいただきました。

しかしそれ以上に大きかった出会いはやはり現地にいる日本人とラオス人の方たちでした。困ったときは相談に乗ってもらったり、休みの日にフットサルを一緒にしたり、食事をしたりと心の支えになると同時に、活動にも繋がりました。

例えば、現地で出会った日本人の方からラオスサッカーのために使ってほしいとボールを50個ほ

どいただきました。

さらにラオスでプロ選手としてサッカーをしている日本人の方たちから「サッカー教室やりたいね！」と言ってもらい、知り合いであるラオス人の教員に連絡し、授業時間に開催することができました。30人ほどの小さなサッカー教室で、ボールはその子たちの学校に寄付。ふと終わった後に気付きました。今まではJICAと、ラオスサッカー協会のどちらかの手助けがあって活動していましたが、今回のサッカー教室は両者に頼らず、ラオスでの日本人・ラオス人との繋がりだけで開催できたことにととても感慨深いものがありました。

2年間の活動の中で特別大きな規模のものではありませんでしたが、私の中ではとても良い経験ができたことに強く残っています。



現地でできた繋がりから開催したサッカー教室

◎大宮アルディージャとの出会い

初めて大宮アルディージャと出会ったのもラオスでした。任期1年目の時に知り合いから大宮アルディージャ事業本部グローバル推進担当の秋元

利幸さんを紹介してもらいました。「クラブのアジア戦略として、ラオスサッカーの育成と普及に携わりたい」と熱く話していただきました。まさに私の活動とマッチしていたので私も二つ返事で協力。秋元さんが帰国してからも連絡を取り、ラオスにはどういったことが必要か話し合い、サッカー教室や指導者講習会、U-19 ラオス代表チームへの指導などを企画しました。「ラオスのことは任せる。」とグラウンドの確保やサッカー教室の選手集め、スケジュールなど多くのことを決めさせてもらったのを憶えています。「Jリーグクラブが開催することを、自分なんかは本当にここまでやらせてもらっていいのだろうか？」という気持ちが出てくるほどでした。

ラオスに Jリーグクラブの指導者を呼べることは、ラオスサッカー協会にとって非常にありがたいことでした。また私にとってもアルディージャのコーチの指導から「選手へ、こういうアプローチの方法もあるのか」と新たな刺激ももらえました。この活動は任期 2 年目の時も一緒にやらせてもらい、サッカー教室の質も上がっていきました。このご縁から、私は大宮アルディージャで働くこととなります。こうして『ເຕະບານ (テバーン) サッカー』は私と大宮アルディージャを繋げてくれました。



ラオスでのサッカー教室

ໂພັບກັນໄຫມ' (ポッカンマイ)

サッカーとラオスに関わることができるということから、大宮アルディージャで働くことを決め、日本へ帰国。ラオスのために何かしたいとは思っ

ていたのでありがたいお話でした。別れ際「ໂພັບກັນໄຫມ' !」が自信を持って言える言葉となり、またラオスに来ることができるだろうということから悲しい感情はありませんでした。

帰国してからは大宮アルディージャで普及活動。平日の午前中に幼稚園や保育園、小学校でサッカー指導を行うキャラバン活動、平日の夕方からは埼玉県内 13 ヶ所に会場があるスクールで園児から小学生までを指導するスクール活動、土日には埼玉県内の様々な場所に行き、サッカー教室とサッカー漬けの幸せな日々。

初めは戸惑うこともありましたが、ラオスで得た指導観と『ບໍ່ເປັນຫຍັງ (ポーペンニャン) 問題ない』の精神で、トライ&エラーを大事にしながら子供たちとともに日々成長しています。



大宮アルディージャスクールの様子

ラオスとの関わりは帰国してすぐの昨年 2 月に U-19 ラオス代表の 3 人の選手、コーチ 1 人を日本に招聘したことでした。青年海外協力隊の任期 2 年目の大宮アルディージャとの活動時にセレクションを行って選んだ選手たちです。

ラオス人選手、コーチには大宮アルディージャのトップチームのトレーニング見学とユースチームのトレーニングに参加してもらい、私は通訳としてサポート。日本のサッカーを知ってもらうことでラオスサッカー発展の一助となればという思いから国際交流基金と、Jリーグの協力の下、生まれた活動です。

昨年 11 月には私がラオスへ行き、青年海外協力隊員時代に協力していた活動に、今度は大宮アルディージャのコーチとして参加。なんだか不思議な気分でしたが、元同僚のラオス人たちも温かく迎え入れてくれ、楽しく活動ができました。活動自体も集まる人数、選手のレベルも上がり、毎年

良いものになっています。今年もセレクションを行い、このエッセイが発行される2月下旬頃、ラオス人選手とコーチを招聘します。



大宮アルディージャのコーチとしてラオスへ

サッカーという一つのスポーツを通し、様々な出会いがあり、日本にいただけでは味わえない貴重な経験を積むことができました。これからもきっと良き出会い、様々な経験ができると思うとサッカーは素晴らしいなと改めて感じます。

私もそうであったように、『ເຕບານ (テバーン) サッカー』で様々な人を繋げていきたいし、繋がった世界を大事にしていきたいと思っています。

読者の皆様、拙い文章で大変恐縮でしたが、最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございました。



ພັບກັນໃຫມ່ ! (ポッカンマイ！)

ໃຊ້ກວ໌ ! (ソークディー！=幸運を！)